



日本聖書神学校 学 報

Japan Biblical Theological Seminary

〒161-0033 東京都新宿区下落合 3-14-16 ・ ☎ 03-3951-1101 ~ 2 ・ Email: jbts@jbts.ac.jp

2020年12月15日

第165号

発行人 神保 望
印刷所 山猫印刷所



【巻頭言】

学ぶこととは

教 授 菅原裕治

今号の内容

巻頭言	1
全校修養会	2
献身志願者の集い	3
2020年の「伝道実習」	4
神学生の声	5

マタイによる福音書は、イエス様の誕生について、1章18節から2章23節までの物語で語っていますが、ここでは「夢」と「星」とが対照的なモチーフとして用いられています。

最初の部分で、主の天使が「夢」で現れて、「正しい人ヨセフ」に対して、「恐れずマリアを妻に迎えなさい」と告げます。するとヨセフは、律法の示す正しさではなく、「夢」の指示に従って行動を始めます。他方で、東方の博士たちはエルサレムにやって来て、その方の「星」を見たので、拝みに来たヘロデ王に告げます。新共同訳では「占星術の学者たち」でしたが、新しい訳では、「東方の博士たち」となりました。しかし、彼らが「星」を見て歩んだことは変わりません。新しい王の誕生を告げられたヘロデも、博士たちをひそかに呼び寄せ、「星」の現れた時期を確かめます。ただし、ヘロデがそうする本当の意図は、その時は明示されません。

博士たちは、東方で見た「星」が先立って進み、その「星」が、幼子がいる場所の上にとまった時、その「星」を見て、喜びに溢れたのでした。彼らは、「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた」のを見ます。彼らが見た光景は描写されませんが、きっと、期待していた事柄とは、異なっていたと思います。しかし、「彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」のでした。持参した宝物が三つであることから、三人の博士たちとされるのですが、大切なのは人数でも宝物の内容でもなく、幼子であるイエス様に出会った瞬間、彼らに大きな変化が起きたことでした。その変化は淡々と告げられます。それまで「星」で導かれていた彼らが、「ヘロデのところへ帰るな」という「夢」の指示に従い、「別の道」を通して自分の国へ帰っていった、と伝えられるだけだからです。

クリスマスの時期に語られるお話は、だいたいここで終わりますが、物語は続きます。博士たちが帰った後も、主の天使が「夢」でヨセフに現れます。そして、幼子と

その母を連れてエジプトへ逃げることを命じるのです。ヘロデが幼子を殺そうとしているからです。ここで、ヘロデが「星」について確認しようとした意図が明示されます。「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ退き」とありますので、いかに急いで「夢」の指示に従ったかが分かります。ヘロデの死後、主の天使がエジプトにいるヨセフに再び「夢」で現れて、イスラエル帰還を指示します。しかし「夢」は、アルケラオのユダヤ統治を理由に、ガリラヤへと目的地変更を指示し、ヨセフはマリアと幼子イエス様を連れて、ナザレに住むこととなったのでした。そして最後に、「夢」に従ったヨセフの行動によって、「彼はナザレの人と呼ばれる」という預言が実現したと告げて、イエス様の誕生物語は終わるのです。

「夢」は、聖書において人間を導くしるしです。ヨセフは「正しい人」でした。その「正しさ」とは、律法を学び、理性的に解釈し行動することです。それも大切です。しかし、ヨセフは、それらを超えた指示を与える、「夢」に終始従ったのでした。他方で博士たちは、黄金、乳香、没薬と宝物を持っていることから、何らかの学術研究の専門家といえます。そして、彼らは、星の軌道という科学的・理性的な結論に基づいて、歩んでいたのです。しかし、信仰を持たない彼らも、幼子イエス様に出会った瞬間、「夢」に従う人へと変えられたのです。その姿は、本来学術研究とは、学びを積み重ねることを通して、地位や特権を求めるのではなく、謙虚にされることが大切であると語っていると思います。わたしたちの神学校の学びも、教会での学びも、全く同じです。学べば学ぶほど、謙虚になることが大切なのです。なぜならば、わたしたちは皆、イエス様に出会っているからです。

人間の理性的な学びだけでは、この地上に主の平和は実現しません。しかし、主なるイエス様に出会うとき、わたしたちの歩みは変えられます。より多くの人イエス様に出会うために、学びを続けたいと思います。

全校修養会

全校修養会「感染症と教会」報告

教授 荒瀬牧彦



まさに我々が直面している問題を取り上げての修養会を10月30、31日に行いました。当初は例年通り修養施設での一泊を計画していましたが、神学校を使つての宿泊・食事はなしの開催へと切り替えました。全学年が集まって活動する機会が乏しい中、顔をあわせて集う場をなんとか持ちたいと開催に踏み切りました。

開会礼拝の説教（海東強神学生）では、集会所としていた教会がCOVID19対策で閉鎖されてしまったため、集う場を失い悲鳴をあげている依存症ミーティングの方の声が紹介されました。事柄の重さを改めて感じつつ、修養会に入ることになりました。一日目夜は、千代田教会牧師・本校講師の戒能信生先生による主題講演「スペイン風邪と日本の教会」を拝聴。スペイン・インフルエンザの際に教会がどう対応したかが、諸教派の機関紙等に丁寧にあたっての共同研究の作業から語られました。多くの死者・患者を出したこの感染症について、ごく一部の牧師・神学者以外は何も語っていないという指摘がなされ、考えさせられたことです。我々は今、このパンデミックをどれだけ神学的・信仰的な課題として考え、語っているでしょう。

二日目は、1) 感染予防に配慮した聖餐式づくり、2) 合意形成の作り方：開めるも開けるも教会が一致して、3) 危機の時の文書伝道の可能性、という三つのワークショップに分かれました。ここでは、筆者が担当し、感染症対策コンサルタントである3年生の堀成美神学生をアドバイザーとして学びを行った1の分団の報告をします。（この学びは『キリスト新聞』11月11号にも取り上げられましたので、ご参照ください。）

このワークショップでは、1. 感染症予防の観点から礼拝実践を検討する、2. 心理的側面から聖餐（礼拝全体）をめぐる決定過程を検討する、3. 神学的にプロテスタント礼拝における聖餐を再考す

る、という三つの柱を立てました。まず1の感染予防については、皆が共有すべき基本的な知識として次のようなことが確認されました。

＊体調不良の者は担当しない。予備のマスクを受付で用意する。

＊感染の90%が息を吐く・吸うことによる飛沫感染である。

＊食物を食べるという行為自体においては感染しない。

＊飛沫の距離はマスクなしでは2mであるが、マスクをすれば1m以下に抑えられる。礼拝においてはマスク着用が不可欠。

＊その距離は、周囲の環境（密閉か、窓を開けているか等）や動作（静かに座っているか、動くか等）によって左右される。

具体的な聖餐の守り方は、教派的伝統や礼拝刷新への姿勢の違いによって流儀・作法が異なりますが、今回の参加者の出席教会は、「サイコロ状に切り分けられたパン」と「個別の小さな聖餐杯」を用いているところが多いので、この方法について、順序を追って検討していきました。

＜買う・焼く・切る・並べる＞ 手指消毒とマスクで対応できる

＜誦える・歌う＞ パン・杯が目の前にある状態では、礼拝者は声を出す行為をしない。司式者は言葉を発する必要があるが、その際はパン・杯から離れているか、覆いや蓋で覆っておくようにする。

＜配餐する＞ 手指消毒とマスクで対応 但し、パンとパンの間をあけることで、自分の取るもの以外に触れないようにするのが望ましいだろう。（トングを用いたり、個別にラップで包む教会もある、という報告あり。）

＜食べる・飲む＞ その時だけマスクを外し、すぐまた着用。

＜片づける＞ 器は普通の洗浄で大丈夫。手袋は不要。前後の手洗いは必須。

アドバイザーより、実際の聖餐式の前に、一度ワークショップをして練習しておくという助言を受けました。また、筆者は「パン割り」を聖餐の重要な行為と考えているのですが、これについて尋ねると、司式者が割く一つのパンと、陪餐者が食するパンを別のものとすれば問題ないというアドバイスがありました。

杯も同じことです。また、配餐者が会衆席に配ってまわる方法と礼拝者が聖餐卓に進み出る方法について言うと、どちらが安全とは単純に言えず、礼拝堂の広さや聖餐卓や椅子の配置によって異なります。人が接近し過ぎずに、飛沫予防できる方法を取ればいずれも行なえるという感触を持ちました。

また、マスクにむやみにさわらない、上手にはずし、はずしたマスクをしまっておく場所を各自考えておくことなどについても話し合いました。細かい事でも感染経路になり得る点には注意する必要がありますし、また反対に、「聖餐は食事なのだからもつてのほか」ということではなく、行為を細かく分割して考え、それぞれの危険を検討し、安全なやり方を実行することを冷静かつ合理的に考えていく姿勢が大切であると学びました。

但し聖餐の検討は、純粋に感染予防の見地だけで済む話ではありません。礼拝者が「安心して」聖餐の祝いに参加できるよう考える必要があります。合理性だけでは解決できない心理的な要素が大きいです。多くの教会で聖餐が停止したままである現状の要因として、「無症状でも感染するというマスコミの情報が4～5月という時期に定着し、その後、データが積み重なってきたにも関わらずそれを反映した修正がなされていないままである」ことが指摘されました。当初騒がれたパチンコ店について、黙って座っているので飛沫の飛散は少ないことが明らかになりましたが、黙って座っている仕方であれば聖餐も危険な行為ではありません。問題は、それを如何に全体の理解としていくかです。強い反対や拒絶のある教会では、学びを丁寧に行ない、じっくり安心をシェアしていくことが求められるでしょう。その過程は「キリストの体」である教会にとって大切なことです。

最後に、オンライン聖餐を認めることの是非（どちらにも根拠あり）、伝統的な霊的陪餐とはどのようなものか、「しばらく聖餐はなしでよい」という発言する牧師がいるが、そもそも聖餐をどう捉えてきたのか、といったことをめぐる考えを持しました。さて、卒業生の皆さまはどのようにお考えでしょうか。

全校修養会報告

湊 理恵(2 年)

2020 年度全校修養会は、10 月 30、31 日に日本聖書神学校を会場にして、「感染症と教会」のテーマで開催されました。

一日目は、「スペイン風邪と日本の教会」— スペイン・インフルエンザ (1918 — 1920) の時、キリスト教会はどう対応したか— の主題で、戒能信生先生から講演をいただきました。

日本やアジアのキリスト教史の年表には、スペイン風邪についての記載はないとのことでした。そして、戒能先生はじめ、各神学大学の先生、柳下明子先生、堀成美神学生のチームによる調査研究の成果を伺いました。各教派の資料や各個教会史等から、「スペイン風邪」や「流行性感冒」などに関する記事を洗い出した資料が示されました。それによると、牧師、信徒の多くが感冒にかかっていて、亡くなった方々もまた多かったこと、そのような

中であっても、礼拝や集会は続けられていたとのことでした。

しかし、その後に起こった関東大震災、戦争などの世界的変動などによって、スペイン風邪のことは忘れられてしまい、当時の日本人キリスト者でこのことに言及したのは、内村鑑三と柏木義円だけだったそうです。

現在の新型コロナとの関連では、この事態を神学的に受けとめて教会の課題とすること、過去の経験から学んで忘れないこと、自然や環境破壊の中に信仰者への問いかけがあること等が指摘されました。

二日目は、①感染予防に配慮した「聖餐式」づくり、②合意形成の作り方 閉めるも開けるも教会が一致して、③危機の時の文書伝道の可能性、の 3 グループに分かれてのワークショップでした。

①では、聖餐式での行動を一つずつ分析

すると、マスクをすることで飛沫を抑えることができ、接触はないとわかるので、聖餐式をあらかじめすることはないとのことでした。そして、実施にあたっては教会の合意形成が必要とのことでした。②では、今年 4 月の役員会で礼拝を続けるかどうかを話し合うという設定で、ディベートが行われました。役員会の一致のためには、方向性の根拠を福音的に決断することが大事とのことでした。③では、バスターで書かれたルターの手紙を読み、また現在のコロナ禍での聖公会、カトリックの対応をお聞きしました。その後、与えられた課題のもとで牧会的手紙を書きました。

二日間の学びのときを作ってくださいました先生方に感謝すると共に、私たちが学んだことをそれぞれの教会で生かせるように、導きを祈りたいと思います。

第 9 回献身志願者の集い

後援会長 菊池公平

第 9 回目を迎える「献身志願者の集い」ですが、今年は 9 月 20 日 (日) から 21 日 (月・休) 二日間の日程で開催されました。これまで 8 回行われた「献身志願者の集い」は毎年 7 月に開催されて来ましたが、今年は 7 月に東京オリンピックの開催が予定されていたため、あらかじめ 9 月に開催時期が変更されていました。準備委員会では 7 月の開催が定着してきた感のある献身志願者の集いを、9 月にズラして開催することには多少の不安もありました。さらに追い打ちをかけるようにコロナウイルス感染症という思わぬ事態が発生したことによって、「集い」自身の開催も危ぶまれるような状態となりました。このような懸念材料の多い状況で果たして献身志願者の方が与えられるのだろうかという心配の気持ちも募りましたが、教授、神学生、同窓生、後援会、諸教会の皆様のお祈りのおかげで 5 名の参加者が与えられました。受け入れスタッフは教授・卒業生 6 名、神学生 10 名、後援会 4 名、職員 1 名で、合わせて 26 名での開催となりました。コロナウイルス禍での開催ということで、東京在住・在勤以外の方は Zoom をご利用いただきオンラインでの参加が出来るように配慮がされました。その結果、2 名の方が神学校での対面参加、3 名の方が Zoom による参加となりました。

9 月 20 日午後 4 時からの開会礼拝で

は神保望校長により、ルカによる福音書 8 章 40 ～ 56 節から「恐れず、ただ信じなさい」と題して説教がなされました。続いて「献身の喜び」について西川優子神学生 (4 年) が、御自身が献身志願者の集いに参加してから神学校に進まれ、実際に教授や先輩牧師による授業を受け、さらに教会での実習をすることによって、自らが伝道者になるという気持ちに確信の変化が与えられた喜びを証しされました。次に土肥研一牧師 (目白町教会牧師) による、牧師になって本当に良かったという伝道者の喜びの日々の奨励によって励ましの言葉が語られました。

「御言葉と静思の時」では佐野恵子姉 (目白教会信徒) のマルコによる福音書の朗読に耳を傾け、沈黙の時をもつことによって、自らの内なる声を聴く時を過ごしました。次に後援会から村上信男兄 (小石川白山教会信徒) から献身者を生みだす教会の喜びについて、教会から一人でも多くの献身者を生みだすことがどんなに大きな喜びであるかが語られました。最後に菊池公平後援会会長 (目白教会信徒) から、伝道者は神から祝福を受けることが約束されている素晴らしい仕事であるとの奨励と神学校への招きの言葉が語られ一日目が終わりました。

二日目の 9 月 21 日は献身志願者全員が Zoom による参加で、神学校からは神保校長、柳下教務部長と在学神学生が対

応して、ビデオによる学校紹介とグループ懇談が行われました。グループ懇談は各学年から 1、2 名と人数を限った参加で、少人数で交流しやすい形式が採られました。担当者からは「終始和やかな雰囲気のもと、自由な意見交換が行われた」と報告されています。

既述の通り、今年の「献身志願者の集い」は、様々な不安と困難の内に開催されましたが、主のお導きによって参加者が与えられ、豊かな交わりの集いを開催することが出来ました。皆様のお祈りに感謝すると共に、引き続き「献身志願者の集い」のためにお祈りとお支えをお願いいたします。

毎年参加された献身志願者の中から神学校への入学者が与えられています。願わくは今年も参加して下さった方々が召命を得て神学校に入学され、伝道者の道へと進まれますように。

「献身志願者の集い」は、献身志願者だけでなく、牧師、神学生、信徒の参加者のすべてが霊的に満たされる素晴らしい交わりの集いです。来年の「献身志願者の集い」に一人でも多くの方が参加して下さるよう、信徒の方々にお勧めいただきたいと思います。

「わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう」と言われた主イエスに委ねることが出来ず、不安感を抱いていた自らを恥じつつ、御言葉の成就に心から感謝いたします。

2020年の「伝道実習」

1泊の実習を受け入れて 田村 博(44期・茅ヶ崎教会牧師)

新型コロナウイルス流行対策としての緊急事態宣言は解除になったものの、感染者数増大の波は、いつ収束するともわからない現状が続いています。神学生たちの主日ごとの教会派遣奉仕も大きな影響を受けつつ、今日に至っていることと思います。

そのような中でこのたび、神学生の土・日一泊の教会実習を受け入れて欲しいとの打診をいただきました。今夏、コロナ禍ゆえに神学生の夏期派遣実習が軒並み行えなくなったため、神学校(都心)から少しだけ離れた場所、すなわち移動距離はあまり長くないところで受け入れ可能な教会を探しているとのことでした。実は、私はこの4月に茅ヶ崎教会に着任したばかりであり、しかもコロナ禍ゆえの通常とは異なる教会運営を強いられてい

る部分がありましたので正直即答できませんでした。しかし、私自身の神学生時代を振り返ったとき、夏期派遣実習はその後の歩みにつながる重要な経験だったことを考えるとお断りすることがためられました。私の場合、3年在学時に夏期派遣実習をさせていただいた鳥取県の米子教会(当時は加藤俊行牧師・7期生)から卒業後の初任地として招聘いただき、それまで一度も訪れたことのなかった山陰の地にて結果的に10年間伝道牧会にあたらせていただくことにつながったのでした。最終学年(4年生)の夏期派遣実習は、青森県・弘前西教会(当時は石川敏一牧師・26期生)に受け入れていただき、これも卒業前のとても貴重な経験となりました。そのような記憶がよみがえる中で、教会にも理解いただき受け入れ

させていただくことにいたしました。

4年生の西川優子神学生には、10月10日(土)から11日(日)にかけて一泊、11月8日(日)には日帰り計2回に分散するかたちで、教会学校礼拝説教、主日公同礼拝説教を担当していただきました。コロナ禍ゆえに訪問なども難しく、役員会への陪席や、牧師家族や教会員との親睦を深めることぐらしか計画できず、申し訳なく思っておりますが、少しでも教会の現場を知り今後に役立てていただければ幸いです。

このたびの機会を通して、神学生・神学校と教会との距離がグッと縮んだように感じております。ありがとうございます。

「夏期伝道」に代えて

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、通常の夏期伝道ができず、夏期伝道に代わるものとして、複数教会での奨励と訪問見学を行うことになりました。私の場合は、群馬県の前市教会で実習中なので、神学校から主任牧師の關橋牧師に、群馬地区で実習させて頂ける教会を呼び掛けて頂けるようお願いし、群馬地区で、群馬町教会、桐生教会、安中教会、そして関東地区から坂戸いずみ教会からの快諾を頂くことができました。コロナ禍でも、実習させて頂きだした教会に心から感謝しています。10月18日から11月15日にかけて、4教会を訪問し、奨励の実習を行いました。

群馬町教会と坂戸いずみ教会は、開拓伝道から教会へと成長した比較的新しい教会で、安中教会と桐生教会は140年以上の歴史を数える昔からの教会です。各

鶴崎 寿(3年)

教会の旧教派や成り立ちもそれぞれで、自分の郷里の近くの教会であります、教会の様子を肌で感じる事ができ、大変勉強になりました。コロナウイルスへの対応も様々で、どの教会でも、感染防止対策と礼拝執行の間で、難しいなか工夫をされているのがよくわかりました。

教会ごとの違いも勉強になりましたが、いずれの教会を訪問しても、共通していたこともあり。まず、信徒の皆さんが、心を込めて歓迎してくださったことです。個々の教会でしてくださったことを一つひとつ書き出すことは、紙面の関係で叶いませんが、信徒の方たちからの期待の様なものを強く感じました。それは、私個人に対してというのではなく、キリスト教の宣教に対するものだと思いました。そして、どの教会の牧師先生も、霊的な励ましをそれぞれの形でください



ました。ここにも、後に続く者への宣教への期待のようなものを感じました。教会には礼拝堂が、そしてその教会の伝統がありますが、教会とは何より信仰を持ってそこに集う人たちの集合体だということをあらためて認識しました。引き続き学びに努めて、福音宣教のはたらきに参与できるよう、祈りつつ進んでいきたいと思ひます。

コロナ禍の中での「夏期伝道実習」

杉野信一郎(3年)

新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たち神学生の学びにも大きな影響を及ぼしました。学校での授業や礼拝、図書館の利用など、その影響は多岐に及びますが、夏期伝道実習もその一つです。母

教会以外の教会に住み込んで行う夏期伝道は、牧会者を目指す神学生にとって、地方の教会の実情や抱えている課題などを肌で感じる貴重な機会であり、卒業のために必要な経験として位置付けられてき

ました。しかし、地方教会が神学生の受け入れに不安を覚え、例年と同じ形での夏期伝の実施が困難な状況となった中で、学校側は「土曜日から教会に宿泊して翌日曜日に礼拝説教をすることを在学中に

二回以上経験すること」という代替措置を講じてくださいました。それにより、私は、今年の夏から秋にかけて、佐野教会（栃木県）と取手伝道所（茨城県）で実習を経験することが出来ました。



佐野教会は、市の旧市街にある信徒十数名ほどの教会です。実習は 8 月 15 日（土）～ 16 日（日）の一泊二日で、説教は土曜の午後に特別に開いて下さった礼拝の中でさせて頂き、夜は登録有形文化財に指定されている歴史的な会堂の二階に泊めて頂きました。牧師の石川榮一先生からは、佐野教会のことや神学の学びのこと、老朽化した会堂の維持管理に関するご苦労など様々なお話を伺い、礼拝後には、信徒の皆さんとも懇談の時を持つことが出来ました。

取手伝道所では 11 月 8 日（日）に日帰りです説教実習をさせて頂きました。取手伝道所も信徒数十名ほどの教会で、以

前は駅から 15 分ほどの団地の中にあっただそうですが、高齢化により子どももいなくなってきたことから、最近、駅からはかなり離れた現在地に幼稚園とともに移転してきたのだそうです。コロナ感染の恐れから信徒の皆さんとの懇談の時は持てませんでした。小林祥人先生や園長をされている奥様から幼稚園の移転や運営に係る貴重な苦労話を伺うことが出来ました。

感染の恐れと不安がある中で、実習の場を与えてくださった両教会の牧師や信徒の皆さんに、そして調整の労を取ってくださった神学校教務部に、この場を借りて心から感謝申し上げます。

神学生の声

2020 年の学校運営は新型コロナウイルス感染症の感染予防のために大きな変更を経験しました。その影響を最も多く被った学生たちのことを憶えていただいている皆さんに、学生たちの声をお届けします。（教務部長代行 柳下明子）

主に信頼しよう

私は今年の四月に愛知県春日井市から東京に越して来ました。入学早々コロナによる騒動が起こり、思ったように神学生としての生活を始められない日々が続きました。入学式は中止となり、授業も当初は ZOOM で行われました。入学前に自分が想像していたものとは全く違う生活の中でふと、自分は何をしに東京に来たのだろう…と思うこともしばしばでした。そのような不安感は、人生で初めて経験するようなものだったかもしれません。

しかし、そのような中で、自分の計画や予想を超えておられる主の導きを実感しま

北田翔太郎（1 年）

した。今年の前半は正直かなり苦しかったのですが、それでも神学校での学びをここまで進めてくることが出来ました。自分の思い通りにならないとき、自分にはどうすることもできない状況の中で、それにも関わらず神様の御手が私を捉えて決して離さないことを確信させられたのです。

神学校に入学しておよそ 8 カ月が経ちました。神学校で学ぶ喜びは、それが直接自分の信仰に繋がっていると言うこと、そしてそれが自分の教会生活にも直結しているということです。また、授業や神学生生活における交わりの中で、自分一

人では考えもしなかったであろうことを学ぶことが出来ました。神学校での学びとは、自分の考えを相対化し、組み立てなおすことの繰り返しなのだと思います。今年、神学校入学とコロナによる非常事態が重なったことによって、自分の今までの考えがまさに根底からひっくり返るような思いがしました。しかし、それも主の御心だったのでしょう。「見よ、新しいことを私は行う」（イザヤ 43:19）。主が行われる全く新しいこと、私の思いを超えて私を導かれる主の御心に、信頼して歩みたいと思います。

コロナに始まり、コロナで終わる一年

加太典子（2 年）

今年はコロナに始まり、コロナで終わる一年となりました。

実習教会では、4 月から、CS 分級はお休みとなり、ペンテコステから再開になりました。主日礼拝（CS 礼拝も含めて）は継続して守られました。コロナの影響で、教会に来られない教会員のために、礼拝は youtube 配信され、今も配信は続行されています。さらに、実習教会では、消毒液の設置、マスクの常備、体温計の設置、聖堂の入念な消毒と窓の開閉による徹底的な換気と、対策を講じています。牧師の「礼拝は必ず守る」という気概を毎日曜日に感じ

ています。

神学校での授業は、4 月のスタートが、二週間遅れて、ズームによる新しい講義形式が、始まり、ズームのための閉塞感満載な、窒息しそうな講義も、しばらく続きましたが、ようやく 6 月になり、ほとんどの講義は、対面式の通常の講義に戻りました。先生方と学校側の迅速な対応に本当に感謝いたします。ただ、徹底的な換気のため、秋までは全く問題もなかったのですが、窓が、全開のため（一応、暖房は入っていますが）、今の季節の夜の講義は本当に寒いです。外より寒いのではないかと思います。席

も密を避けるために、間隔をあけて、座ります。学校の礼拝は、当初は、ズーム形式でしたが、まもなく聖堂で礼拝できるようになりました。聖餐式は残念ながら、まだ執り行われておりません。さらに、コロナウイルス感染症についての皆の理解を深める為に、11 月の全校修養会では、100 年前のスペイン風邪の流行と当時の教会の対応について戒能先生の講演が行われました。コロナに対する正しい知識と理解をもって、主と共に 2021 年の学校生活を送りたいと思う次第です。シャローム！

リモート授業と対面授業を受講して

横内 純（2年）

主の御名を賛美致します。日々お支え下さっている多くの教会、関係者の皆様に感謝致します。

2020年度につきましては新型コロナウイルス感染症にて変則的な講義形態となりました。前期を振り返ってみますと、ほぼリモートによる講義でありました。しかしリモート講義であってもきちんと学ぶことができたのだと私は感じています。確かに対面方式の方がより先生方とも直接意見交換やクラスメイトとのコミュニケーションをとることはできます。しかし配布資料は紙媒体よりデータによる配布がより良いのではないかと個人的には思います。後期では対面が増えたので嬉しい限りであります。き

ちんと学ぶ環境が整いつつあることも一つにはありますがやはり先生方、クラスメイトとの直接的なコミュニケーションに勝るものは無いと感じるのです。

私達神学生が日々学ぶことができるのは教会を初め多くの方々への支えと祈りがあってこそだと思っています。私自身は非常に小さく愚かな人間です。身体障害があることも加えて一人でできることというのは微々たるものなのです。しかし現在仕事をしながら学ぶことができているのは神様と皆様のお支えがあるからです。時間的に考えますと日中働きながら夜学ぶとは大変と思うかもしれません。確かに肉体的、精神的に疲れはあります。ですが疲れ以上に恵み、癒しであると感

じます。今しか学ぶ機会は無無いと思っています。私にとってあらゆる講義は癒しとなり、おりむしろ一日の仕事の疲れを無くしてくれているようにも感じます。勿論仕事を通じて経験や知識を得つつさらに講義を経て知ることができるのです。これらは私の力に寄るものではありません。先程も記述しましたように小さい者です。神様と皆様と共にいて支えて下さっているからだと思います。神様と皆様へ心から感謝致します。

世には様々な出来事があります。しかし決して一人ではなく共にいて下さる方がおられることを信じつつ仕事や勉学に励みたいと思います。

コロナ禍における学校生活・教会生活

内田隆彦（3年）

皆様、こんにちは。日本聖書神学校3年生の内田隆彦です。日本聖書神学校のことを覚えて下さり、また、支えて下さっていることを感謝いたします。

今年は新型コロナウイルスの影響で特別な年となりました。皆様方の教会においても、礼拝が休止されたかも知れませんが、礼拝が休止されない場合でも、聖餐式を休止したり、礼拝時間を短縮したり、愛餐を中止した教会が多いと聞いています。私が実習を行っている池袋西教会（東京都豊島区）も約2か月間礼拝が休止となりました。また、今も礼拝の時間は短縮され、聖餐式・愛餐は休止されたままです。11月21日現在、新型コロナウイルスは依然として猛威を振るっており、

私たちは引き続き困難の中にいて、先行きが見通せない状況です。

日本聖書神学校も新型コロナウイルスの予防対策のため、入学式が中止されました。授業も約1か月間休止となりましたが、学校の速やかな対応で、5月からZOOM（オンライン）による授業が再開されました。現在も対面（通常）の授業とZOOMによる授業の二つの形態で学びを進めています。ZOOMによる授業が始まったときは、慣れないこともあってすぐに疲れてしまいました。今は大分慣れて来ましたが、やはり対面（通常）の授業の方が格段にいいと思っています。

先日、約100年前に日本でも流行したスペイン風邪の事例について学びました。

スペイン風邪と新型コロナウイルスは同じ感染症です。スペイン風邪の時も、マスク着用、人混みに出ない、患者の隔離等今回と殆ど同じ対策が取られていたようです。また、神戸市の学校では全面休校となりました。このスペイン風邪も時間が経過すると共に終息を迎えました。なぜか？ほとんどの人が免疫抗体を獲得したからということです。新型コロナウイルスもワクチンが開発され、終息を迎えるまではお互いが良き隣人として、我慢することが大事なことではないかと思っています。

新型コロナウイルスの一日も早い終息を祈ると共に、皆様の健康を心よりお祈りします。

オンライン受講を継続して

山野 空（4年）

今年度は、コロナウイルスの猛威が振るわれる中でのスタートとなりました。緊急事態宣言を受け、目に見えない相手、また先の見えない状況に、みんなが不安を覚えていました。実習教会も家庭礼拝となり、いつもと異なる形の礼拝になりました。わたしだけでなく多くの方が不安を抱える中でのスタートとなったことと思います。

茨城県にわたしは在住しており、神学校のある目白に行くには、茨城から東京まで、電車で4つの県を通らなくてはなりません。当時1歳と0歳の息子と娘がいたこと、教会付属のこども園が牧師館に隣接していたこと、感染する心配、さ

せる心配、両方の心配が重なっていました。そのため緊急事態宣言解除後も、すぐには神学校に行くことができませんでした。そのことを神学校に相談したところ、授業をオンラインにさせていただき、なんとか授業に参加することができました。

小さい子どものある中では、自分のことだけに集中できる時間は、思うように取り難く、それは課題やオンラインの授業中もそうでした。子どもたちが遊ぶ中、或いは時に泣き声が聞こえる中での授業となりました。特にパソコンに興味を持っていじりくる0歳の娘は、パソコンのモニターと一緒に映りながら授業を受け

ることが多々ありました。そのような中でも、同級生・先生方に温かく見守られ、理解されて授業を受けることができました。

直接、同級生とは会えないオンラインでの授業では、神学生の大変さを分かち合ったり、何気ない会話をしたりすることは、あまりできません。そのことは、とても寂しく思っていました。非常事態に遠方から授業が受けられることは喜びでした。多くの配慮を受けて神学校生活を送ることができたことを、とても感謝しています。